9日　第53回鳥取県がん征圧大会

がんの正しい知識と意識を深める「鳥取県がん征圧大会」（鳥取県、同県医師会、同県保健事業団主催、新日本海新聞社後援）が9日、鳥取市のとりぎん文化会館で開かれる。午後1時半～同3時半。入場無料。事前予約不要。

9月1日～30日のがん征圧月間に合わせ、早期発見、早期治療の認識を広め、予防意識を高めるとともに、対がん運動に対する理解と協力を求める。

がん対策従事者への知事表彰のほか、対がん事業功労者と結核予防事業功労者への感謝状の贈呈、「千代水の森おなかと内科のクリニック」（鳥取市千代水2丁目）の満田朱理医師の講演がある。

問い合わせは電話0857（26）7194、県庁健康政策課。

9月は「がん征圧月間」

健康は予防と検診の二刀流

日本人の死亡原因で最も多い「がん」は、2人に1人がかかるとされているが、早期に見つけて治療を始めれば、決して治らない病気ではなくなっている。がんで死亡する人を一人でも減らしていくため、鳥取県では自治体、医療機関、企業などが連携し、社会全体で予防行動の推進やがん検診受診率の向上に向けた取り組みが進む。9月の「がん征圧月間」を機に開催する9日の「がん征圧大会」の概要、県内のがん医療に携わる医師ら関係者の考察などを紹介する。

鳥取県がん征圧大会で特別講演

鳥取県がん征圧大会で、特別講演する満田朱理医師に、肝がんについて聞いた。

鳥取県がん征圧大会で特別講演　満田朱理医師に聞く

生活習慣の改善と検診で肝がん予防

罹患者は希望持ち治療を

千代水の森おなかと内科のクリニック　満田朱理医師

―「肝がん」とはどのような病気か。

肝臓にできるがんの総称。肝臓は「沈黙の臓器」とよく言われており、病気が進行しても自覚症状が現れにくく、肝がんも例外ではない。かつては型・C型肝炎ウイルスが、原因の約8割を占めていたが、ウイルス性肝炎のコントロールが可能になったことで、近年は脂肪肝、飲酒、糖尿病など生活習慣病に関連するウイルスに起因しない肝がんが増加しており、新たな課題になっている。

鳥取県がん征圧大会で特別講演する満田朱理医師に、肝がんについて聞いた。

―肝がんの主な症状は。

肝臓は「沈黙の臓器」とよく言われており、病気が進行しても自覚症状が現れにくく、肝がんも例外ではない。かつては型・C型肝炎ウイルスが、原因の約8割を占めていたが、ウイルス性肝炎のコントロールが可能になったことで、近年は脂肪肝、飲酒、糖尿病など生活習慣病に関連するウイルスに起因しない肝がんが増加しており、新たな課題になっている。

課題は、もはや他人事ではなくなっている肝がんについて、会場の皆さまと考えたいと思っている。

―肝がんを予防するには。

早期発見、早期治療につなげる習慣付けと運動や食事などの生活習慣の改善が必要だ。

検診でB型・C型肝炎ウイルスを特定することが分かっている。精密検査を受けていても、肝がんへ進行してしまうケースが少なくない。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

また、近年基礎疾患のない若い人の肝がんが増えているとも聞く。そして、男性の肝がんが進行してしまうケースが多い。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

また、近年基礎疾患のない若い人の肝がんが増えているとも聞く。そして、男性の肝がんが進行してしまうケースが多い。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

―肝がんを予防するには。

医療従事者は、患者が病院などの生活習慣の改善が必要だと言い続けることが分かっていても、糖尿病を受けず、肝がんへ進行してしまうケースが多い。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

医療従事者は、患者が病院などの生活習慣の改善が必要だと言い続けることが分かっていても、糖尿病を受けず、肝がんへ進行してしまうケースが多い。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

―講演を通して伝えたいメッセージは。

医療従事者は、患者が病院などの生活習慣の改善が必要だと言い続けることが分かっていても、糖尿病を受けず、肝がんへ進行してしまうケースが多い。肝がんを発症する可能性のある肝炎ウイルス感染者を拾い上げ、受診勧奨し、治療に結び付けることが重要だ。定期的に検診を受け、かかりつけ医に肝臓に異常がないか診てもらってほしい。

出典：2024年度　疾病構造の地域特性に関する研究事業「鳥取県の肝細胞がんの実態と非ウイルス性肝疾患の拾い上げ事業」

子宮頸がん 適切な予防を

ワクチン接種と検診重要

鳥取県保健事業団総合保健センター所長　皆川 幸久氏

子宮頸がんはワクチン接種と定期的な検診で大半を予防できる。

頸がんの主な症因はトパピローマウイルス（HPV）の持続感染であり、HPVワクチンは高い感染防効果を示す。性交開始前から高校1年までの女子を対象に定期接種が行われているが、国による積極的な接種勧奨の中断既既もあり、接種率が伸び悩んでいる。また、接種機会を逃した世代に対し期間限定で公費による補助キャッチアップ接種が実施されたが、接種率は十分でない。20～30代の若い層で罹患数が増加しており、予防対策の出遅れも懸念される。

否めない。

また、頸がんの二次予防である検診は極めて有効である。子宮頸がん検診で前がん病変や早期がんを発見できれば子宮の温存治療が可能となるが、若年世代の受診率は高くない。進行した頸がん患者の大半が検診未受診であることから、若年世代で定期的な検診受診が強く望まれる。

一方、子宮体がん（子宮内膜がん）は更年期以降に好発し、肥満、ホルモンバランスの変化などを引き金とされ、生活習慣病予防が一部の体がん予防につながり得る。早期から不正性器出血を生じることが多いため、特に50歳以上の女性で自覚症状があるときには医療機関の受診を勧めたい。

県内の医療機関検診では、子宮頸がん検診時に必要に応じ、経腟超音波検査によって子宮内膜の肥厚をしばしば認める。これは、がんの予防について正しい知識を持ち、自分の体を守る一歩を踏み出してほしい。

鳥取県がん診療連携協議会　とりがんねっと

がんについてともに考えませんか？

“鳥取県がん診療連携協議会”とは？

鳥取県がん診療連携協議会では、県全体のがん診療の質の向上のため、県内の主要な11病院、鳥取県、鳥取県医師会が連携し、地域における相談支援や緩和ケアの提供体制の確立、院内がん登録の充実、各病院の治療実績を共有、評価する様々な活動に取り組んでいます。

■**鳥取県がん診療連携拠点病院**
鳥取大学医学部附属病院

■**地域がん診療連携拠点病院**
鳥取県立中央病院
鳥取県立厚生病院

■**地域がん診療連携拠点病院に準じる病院**
鳥取市立病院／鳥取赤十字病院／
鳥取生協病院／野島病院／博愛病院
米子医療センター／山陰労災病院／済生会境港総合病院

“とりがんねっと”とは？

“とりがんねっと”は、鳥取県がん診療連携協議会の運営により、がん診療に関する様々な情報を県民の皆さんへ広く提供するために開設されました。がんに関する説明や関係する外部機関へのリンク、県内で開催される公開講座・研修会など様々な情報を掲載しています。

“とりがんねっと”は どんな情報を掲載しているの？

■市民公開講座、イベント
■がんの事を詳しく説明した動画
■がん相談支援センター
■患者サロン・患者会
■がん検診

お気軽にアクセスしてみてください。
https://cancer-center.med.tottori-u.ac.jp/tccc/

とりがいち病院がんセンターHPでもがんに関する様々な情報を提供しています。
鳥取大学医学部附属病院　がんセンター　[TEL]0859-38-6292
〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1　[FAX] 0859-38-6297　[HP] https://cancer-center.med.tottori-u.ac.jp

鳥取県保健事業団では、
鳥取県全域の健診・検査が可能です

当事業団では、現在15台の健診車を保有しており、県内(東・中・西部)の各基地に配車しています。
施設健診だけでなく巡回健診を実施し、皆さまのニーズに合わせた健康診断に対応しています。

問い合わせ先
施設健診・巡回健診の
お問い合わせは
1 3 4 まで

❶本部健診センター
鳥取市富安2丁目94-4
TEL0857-23-4841
FAX0857-23-4892

❷総合保健センター
（立川事務所）
鳥取市立川町6丁目176
TEL0857-23-4843
FAX0857-23-4862

❸中部健診管理センター
倉吉市米田町2丁目81-2
TEL0853-27-1223
FAX0853-27-1224

❹西部健診管理センター
米子市流通町158-24
TEL0859-39-3288
FAX0859-39-3277

★がん検診（健康増進法に基づく）
胃がん・子宮がん・乳がん・肺がん・大腸がん・前立腺がん ほか
その他、各種健診や人間ドック、生活習慣病予防健診なども受け付けています

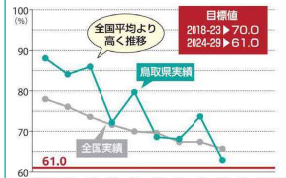
職場の、そしてあなたの健康と環境を守ります
公益財団法人鳥取県保健事業団
Tottori Health Service Association
https://www.toriholen.or.jp/

鳥取県 がん死者減少傾向

県、総合的な対策推進

鳥取県で2023年にがんで亡くなったのは1895人と、年々減少傾向にある。これに伴い、がん対策の指標になる「75歳未満がん年齢調整死亡率」は増減を繰り返しながら、緩やかに低下している。

特に23年の死亡率は62・9％（全国17位）は、前年の73・7％（全国41位）から27・4ポイントと減少した。



県は、第3次鳥取県がん対策推進計画（18～23年度）では目標値を61・0％未満とする計画の全体目標に掲げ、引き続き検診受診率の向上に努めるとしながら、医療提供体制や予防など総合的ながん対策を推進していく。

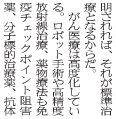
21年に県内で新たにがんと診断された患者は4094人（前年の2038人）。部位別では男性がん患者の多い消化器系（胃、前立腺、大腸、女性の乳房、大腸、胃の順に多かった。

Point　数字は調査死亡率　単純に死亡者数を人口で割っただけの数値では高齢者の多い都道府県では高くなり、若年層の多い都道府県では低くなる傾向がある。このため全国の都道府県が同じ年齢構成（1985年の全国人口）と仮定し、人口10万人当たりで算出することで、より正確に地域間の比較をやすくしている。

比較して高い値で推移してきた75歳未満がん年齢調整死亡率を低下させることを大きな課題の一つと位置付ける鳥取県。第4次鳥取県がん対策推進計画（24～29年度）では目標値を61・0％未満とする計画の全体目標に掲げ、引き続き検診受診率の向上に努めるとしながら、医療提供体制や予防など総合的ながん対策を推進していく。

21年に県内で新たにがんと診断された患者は4094人（前年の2038人）。部位別では男性がん患者の多い消化器系（胃、前立腺、大腸、女性の乳房、大腸、胃の順に多かった。

鳥取大医学部付属病院 がんセンター長　小谷 昌広氏



がん医療高度化、細分化

治療方針、しっかり対話を

がんの標準治療とは、科学的な根拠に基づいた現時点での「ベストプレイ」とされる治療だ。新たな治療法が次々と開発されるが、従来の治療と比較して優れた標準であることが証明されれば、それが標準治療となるからだ。

がん治療は高度化している。ロボット手術や高精度放射線治療、薬物療法も免疫チェックポイント阻害薬、分子標的治療薬、抗体に薬物を結合させたがん細胞を攻撃する抗体薬物複合体（ADC）、血液のがんに対するCAR-T療法など細分化し、複数を組み合わせる場合もある。副作用の対応などもあり、高度な治療を提供できる病院は限られる。国は「第4次がん対策推進基本計画」で、がん医療の均てん化に加え、集約化を打ち出しており、鳥取県の機能分担は十分重要だ。

がん拠点では、医師としっかり話をして、家族なども含めて治療方針を決めるべきだ。何を治療の第一目標とするのかを考え、副作用も含めて理解した上で、主治医以外の専門家の意見を聞くセカンドオピニオンを受けてもいただく。

主治医以外の専門家の意見を聞くセカンドオピニオンが、がん診療連携拠点病院などが行っているがん相談では患者情報は匿名で扱うため、がんに関する仕事をやめる人も少なくないが、ソーシャルワーカーを中心に就労支援の取り組みも進んでいるので、まずは相談を。早期からの治療の負担を軽いものにし、がん検診を欠かさず受けることも重要だ。

鳥取大医学部附属病院 放射線治療科教授　吉田 賢史氏

ニーズ高まる放射線治療

高精度、体への負担軽く

IMRTなどを行う外部放射線治療装置（リニアック）

放射線治療はがんの3大治療の一つで、部位によっても異なるが、体にメスを入れないため侵襲が少ない。通院治療も可能で化学療法や治療と組み合わせることで効果が高まるとしたのが特長だ。

がんの特長があり、ニーズが高まっている治療法だ。当院では、頭頸部がんに放射線を照射する機能温存治療（IMRT）をはじめとした高精度放射線治療に注力し、がんの治療成績向上に努めている。

放射線治療はがんの局所療法の一つだが、転移後も可能な場合があり、オリゴ転移にとどまり数の少ない転移にはIMRTによる治療が保険適用になっている。当院ではIMRTを中心としつつ、転移性脳腫瘍や末梢型肺がん、肝臓がんに対する定位放射線治療（SBRT）を行っている。

さらに、前立腺がんに対する小線源治療（ヨウ素）、骨転移の痛みや脳転移の症状を和らげるための緩和的治療など、幅広い治療を行っている。

鳥取県内では現在、当病院と県立中央病院の2カ所で高精度放射線治療を行っている。がんの治療は進化を続け、高度な機器や薬も増えた。人口が減少する中、人材育成に加え医療経済の観点からも、10年先を見据えた取り組みを進めなくてはならない。

放射線治療は最大の強みは、がんを治せるという点だ。精度が高く体への負担が少ない放射線治療を県内で提供していくため、さらに高精度放射線治療を推進したい。

線源治療（IGBT）も行っており、この三つを高精度放射線治療の柱としている。

がんなどの婦人科がんに対するMRI画像誘導小線源治療（MRI-IGBT）を行っており、この三つを高精度放射線治療の柱としている。

さらに、前立腺がんに対するA線源治療（ヨウ素）、骨転移の痛みや脳転移の症状を和らげるための緩和的治療など、幅広い治療を行っている。

鳥取県内では現在、当病院と県立中央病院の2カ所で高精度放射線治療を行っている。がんの治療は進化を続け、高度な機器や薬も増えた。人口が減少する中、人材育成に加え医療経済の観点からも、10年先を見据えた取り組みを進めなくてはならない。

放射線治療は最大の強みは、がんを治せるという点だ。精度が高く体への負担が少ない放射線治療を県内で提供していくため、さらに高精度放射線治療を推進したい。

鳥取県 県内75歳未満がん死者減少傾向

県、総合的な対策推進

鳥取県で2023年にがんで亡くなったのは1895人と、年々減少傾向にある。これに伴い、がん対策の指標になる「75歳未満がん年齢調整死亡率」は増減を繰り返しながら、緩やかに低下している。

特に23年の死亡率は62・9％（全国17位）は、前年の73・7％（全国41位）から27・4ポイントと減少した。

県は、第3次鳥取県がん対策推進計画（18～23年度）では目標値を61・0％未満とする計画の全体目標に掲げ、引き続き検診受診率の向上に努めるとしながら、医療提供体制や予防など総合的ながん対策を推進していく。

21年に県内で新たにがんと診断された患者は4094人（前年の2038人）。部位別では男性がん患者の多い消化器系（胃、前立腺、大腸、女性の乳房、大腸、胃の順に多かった。

Point　数字は調査死亡率　単純に死亡者数を人口で割っただけの数値では高齢者の多い都道府県では高くなり、若年層の多い都道府県では低くなる傾向がある。このため全国の都道府県が同じ年齢構成（1985年の全国人口）と仮定し、人口10万人当たりで算出することで、より正確に地域間の比較をやすくしている。

鳥取県市町村が実施するがん検診受診の状況

※受診率は%

（年度）	2023		2022		2021		2020		2019		増減（23-19）	
	受診者数	受診率	受診者数	受診率	受診者数	受診率	受診者数	受診率	受診者数	受診率	受診者数	受診率
子宮頸がん	29,942	24.6	30,310	24.9	30,942	25.4	29,851	23.0	32,318	24.9	△2,376	△0.3
胃がん	47,242	26.0	47,499	26.2	48,744	26.9	46,168	24.4	52,494	27.8	△5,252	△1.8
肺がん	52,503	28.9	53,277	29.4	53,894	29.7	49,733	26.3	54,671	28.9	△2,168	△0.0
大腸がん	52,070	28.7	52,647	29.0	53,884	29.7	52,107	27.6	57,476	30.4	△5,406	△1.7
乳がん	16,850	15.4	16,933	15.5	17,631	16.2	16,249	14.1	19,228	16.7	△2,378	△1.2

対象者数は、職域でがん検診の受診の機会のある者を除くものであり、国勢調査結果をもとに推計
対象年齢は▼胃がん、肺がん、大腸がん　40歳以上の男女▼乳がん　40歳以上の女性▼子宮頸がん　20歳以上の女性

鳥取県内　市町村が実施する子宮頸がん精密検査受診の状況

※受診率は%

（年度）	2023			2022			2021			2020			2019			23-19
	要精検者数	精検受診者数	精検受診率	要精検者数	精検受診者数	精検受診率	要精検者数	精検受診者数	精検受診率	要精検者数	精検受診者数	精検受診率	要精検者数	精検受診者数	精検受診率	受診率
子宮頸がん	202	169	83.7	351	284	80.9	369	297	80.5	534	467	87.5	466	396	85.0	△1.3

出典：鳥取県健康対策協議会報告

HPVワクチン接種して
子宮頸がん予防、定期接種も

厚生労働省などは、子宮頸がん予防にHPVワクチン接種を呼びかけている。

小学5年生～高校1年生相当の女性を対象とした定期接種が行われている。対象年齢を過ぎた1997年4月2日～2005年4月1日生まれの女性も、25年3月末までに1回以上接種していれば、残りの接種も26年3月末までなら無料となる。関係機関は「会は回（綿棒と初回接種の年齢によって全2回）の接種を忘れずに完了してほしい」としている。

この期間を逃すと、HPVワクチンを3回接種するのに最大10万円程度かかる。具体的な接種手続きについては、在住の市町村担当窓口へ。